

## 2022 年度事業 進捗報告書（実行団体）

- 提出日 : 2022年 9 月 14 日
- 事業名 : ところをつなぐアフターケア事業
- 資金分配団体 : 公益財団法人 ちばの WA 地域づくり基金
- 実行団体 : 一般社団法人 はこぶね

### ① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況 *
入所児童が社会との繋がりを持つことができる	インケア実施回数	月 1 回、 のべ 32 回	2021 年 6 月～ 2024 年 1 月	<p>月 0 回 のべ 0 回、達成できていない。</p> <p>該当施設へのインケアは、コロナの懸念から実現できていない。また、施設関係者から今後も施設内での活動受け入れは厳しいという話があったため、想定していた施設でのインケアは断念し、施設の新規開拓に乗り出した。本事業の実行団体の中の施設をあたって施設長の許諾は得たものの、やはりコロナによる感染危機が高まり保留となった。その結果、指標のインケア実施の目標値は 0 である。</p> <p>しかし、つながりを持っている入所児童が居場所を訪れているため、入所児童と社会とのつながりは保たれている。</p>	2

<p>入所児童が施設以外の資源を知ることができる。</p>	<p>チラシ配布回数 SNS 告知回数</p>	<p>チラシ配布(イベント)のべ10回 チラシ配布(居場所)のべ32回 SNS 告知(イベント)のべ10回 SNS 告知(居場所)のべ32回</p>	<p>2021年6月～ 2024年1月</p>	<p>チラシ配布(イベント)のべ0回 チラシ配布(居場所)のべ0回 SNS 告知(イベント)のべ8回 SNS 告知(居場所)のべ11回 入所中の児童に告知するためには施設との関わりが前提となる。施設に入れない現状では、指標のチラシ配布は0回。しかし、Line・Instagram など SNS を通してイベント、居場所ともに11回の告知ができているため、予定通り。</p>	<p>2</p>
<p>入所児童が居場所を利用する。</p>	<p>参加者数</p>	<p>参加人数 384 人 (1回3人×月4回×32回)</p>	<p>2021年6月～ 2024年1月</p>	<p>参加人数のべ112人 (1回2人×月4回×15回) 現時点において達成。 これまでのべ60回のべ112名の参加があった。当初、月4回を想定したが、子どもたちの居場所利用回数は、予定よりかなり早いペースで行われている。</p>	<p>1</p>
<p>入所児童がイベントに参加する。</p>	<p>イベント実施回数 参加者数</p>	<p>2021年度3回 2022年度4回 2023年度3回 (各回5人のべ50人)</p>	<p>2021年6月～ 2024年1月</p>	<p>2021年度0回 2022年度4回 計24人 昨年は未達成、今年はすでに目標値を達成している。今後も月一回のイベントを予定しているため、目標値は達成できる見込み。</p>	<p>2</p>

オトモダチ作戦の説明会に参加する施設の職員が増える	オトモダチ作戦説明会に参加する施設の職員数	2021年度15人(3回×5人) 2022年度20人(4回×5人) 2023年度15人(3回×5人)	2021年7月～ 2022年3月 2022年4月～ 2023年3月 2023年4月～ 2024年1月	2021年度0回 2022年度1回 新型コロナウイルスによるクラスター発生の懸念から施設訪問が1回に留まる。施設職員への説明会も厳しい。事業計画のアウトプットの見直しが必要である。	4
オトモダチ作戦を実行するためのフレンズが増える	研修会参加人数	2021年度15人(3回×5人) 2022年度20人(4回×5人) 2023年度15人(3回×5人)	2021年7月～ 2022年3月 2022年4月～ 2023年3月 2023年4月～ 2024年1月	2021年度のべ15回個人研修 2022年度のべ139回個人研修、集団研修は1回のみ実施。 現在、登録しているフレンズは15人。コロナ禍で集団研修の実施が難しい状況であったが、志望者には個別に対応し、フレンズへの登録につなげた。これまで40件の問い合わせ、30件の初回面談中、15人が登録、活動している。	4
オトモダチ作戦のマニュアルのドラフト版が作成される	ドラフト版の有無	ドラフト版が完成する	2022年8月	ドラフト版が完成した。 達成。 フレンズの心得、子どもたちに接する際の簡単な情報を記載した3枚刷りのものが完成した。	2
オトモダチ作戦のマニュアルが作成される	マニュアルの有無	マニュアルが完成する	2024年1月	マニュアル未完成。 ドラフト版を元に、当活動を開始、続けてもらうためにどのような人員構成、体制が必要なのかを洗い出している。	2

<p>オトモダチ作戦の活動が周知される。</p>	<p>HP 月間アクセス数 Instagram フォロワー数 問い合わせ件数</p>	<p>HP 月間アクセス数 アクセス 15 件 Instagram フォロワー数総 150 フォロワー 問い合わせ件数：のべ 100 件</p>	<p>2021 年 7 月～ 2024 年 1 月 2024 年 1 月 2024 年 1 月</p>	<p>HP 月間アクセス数平均 83 件 Instagram フォロワー数総 156 フォロワー 問い合わせ件数：のべ 40 件 現時点で目標値すでに達成 HP 開設後の累計アクセスは 836 であり、月間平均 83 件と予定より進んでいる。Instagram のフォロワーも 156 と既に目標値を達成。しかし、問い合わせ件数は、40 件にとどまっているため、予定通りとした。問い合わせは地域新聞に当事業関連記事が掲載された後に急増した。</p>	<p>2</p>
<p>事業を継続的に実施するための経済基盤を確立する</p>	<p>賛助会員数 寄付額</p>	<p>賛助会員 100 名 寄付総額 3 年間 415 万円</p>	<p>2024 年 1 月 2024 年 1 月</p>	<p>賛助会員 6 名 寄付総額 1.5 年間 80 万円 現地点で目標金額の達成見込みなし。 8 月から賛助会員の募集を始め、6 人が登録した。しかし、寄付金に関しては見通しが立てられず予定より遅れている。</p>	<p>3</p>
<p>人材が育つ</p>	<p>会計・企画・運営ができるスタッフ数</p>	<p>4 人</p>	<p>2024 年 1 月</p>	<p>4 人 達成。現在 4 人のスタッフが本事業の会計、企画、運営に携わっているため、目標に向けて一步前進したものと判断した。今後は個別のスキルアップを図っていきたい。</p>	<p>2</p>

\*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

## ② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
3.課題がある
2.アウトカムの状況
A: 変更項目 <input type="checkbox"/> 変更なし <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
居場所に訪れる子どもたちには、感染防止対策として検温を実施、訪問カードに記入（日付、名前、体温）、アルコール消毒、体調がすぐれない場合には事前に連絡を取り訪問を控えてもらう、などを徹底し、居場所を活用している。

## ③ 広報（※任意）

1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）

地域新聞東葛版 2021年12月23日発行

ふくろう FM2021年12月3日出演

2.広報制作物等

3.報告書等

## 2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

### 評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	有識者インタビュー、報告書校正	大藪真樹	代表理事
内部	報告書校正	ペ・スヨン	監事
内部	報告書作成	飯田風香	理事
内部	インタビュー項目作成、第三者調査、報告書作成	吉澤祐介	理事
外部	インタビュイー、評価への協力	齋田由美	ちばアフターケアネットワークステーション
外部	インタビュイー、評価への協力	中村史織	ちばアフターケアネットワークステーション

### A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

#### ① 短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
オトモダチ作戦に参加した社会的養護下の若者（オトモダチ作戦に参	オトモダチの有無、オトモダチへの信頼感や深まり度合い	オトモダチ作戦の活動に参加した5割の児童に一人以上のオトモダチがい	2024年	居場所に来て自分のことをフレンズに話し、問題解決に向けて動いている若者が16人中8人（5割）。 現在、居場所において若者たちは、オトモダチに自分の身の上話をしたり、自分達が抱えている問題を打ち明けた

<p>加した社会的養護下の若者)一人一人がオトモダチを獲得し、そのオトモダチに自分のことを話せるようになる</p>		<p>て、そのオトモダチに自分のことを話せている状態。オトモダチとの信頼感が深まっている状態。</p>		<p>り、また、解決方法を一緒に考え、それに向けて行動するようになっている。若者たちの慣れない者への警戒を取り除くためにも、オトモダチにはできるだけ居場所に顔を出すよう伝えている。</p>
<p>児童養護施設の職員(児童養護施設の職員がオトモダチ作戦の必要性を理解し、積極的に協力している)</p>	<p>職員のオトモダチ作戦への理解度 協力の度合い</p>	<p>説明会に参加した児童養護施設の職員の5割がオトモダチ作戦に関する理解が深まっている状態。 協力してくれる職員が初期値より増加している状態。</p>	<p>2024年</p>	<p>説明会に参加した児童養護施設の職員がオトモダチ作戦に関する理解が深まっている状態は0割。 当初は、施設長の許可の元、説明会を開く予定であった。しかし、コロナ禍での制限もあり施設関係者は外部の人を施設内に入れたい旨を明らかにした。施設内でのインケア活動実施を目標とし、施設職員の理解を指標に設定していたが、施設側の受け入れが厳しくなったため、事業計画の変更が必要であると思われる。今後は、児童養護施設の職員に限らず、適宜、関係者に必要性を伝え、説明会を開けるよう協力していただく。従って、主体は施設側の受け入れ、指標は説明会を開催する、に変更する。</p>
<p>オトモダチ作戦の研修会に参加した人(オトモダチ作戦の研修会に参加した人がフレンズとして登録し、前向きに活動してい</p>	<p>フレンズ登録者数 フレンズの意欲の向上度</p>	<p>研修会に参加した5割の人がフレンズとして登録。 オトモダチ作戦に参加しているフレンズの意欲が初期値より向上してい</p>	<p>2024年</p>	<p>フレンズ登録5割(フレンズ登録者/研修会参加者)向上している  コロナ禍により、当初予定していた集団研修が行えなかった。しかし、個別での研修を行ったところ、社会的養護に関する理解も深まり、集団状態では聞きづらい話もフレンズから聞いた。また、居場所に頻繁に通うなど、オトモダ</p>

る)		る。		<p>チ作戦にも積極性も見られるようになった。そこで、フレンズとスタッフ間にも個人的な関係性作りが有効であることが明らかになった。</p> <p>ただし、フレンズの意欲の向上を図るための指標が明確ではないため、指標はフレンズとして登録した人が月1のペースでオトモダチ作戦に参加する割合に変更し、目標は、フレンズとして登録した人の5割がオトモダチ作戦に積極的に参加している、に変更する必要があると判断した。</p>
フレンズ（オトモダチ作戦のデータや資料を元にしたノウハウがフレンズに伝授され、活動に活かされている）	オトモダチ作戦ノウハウの認識度の変化	全てのフレンズが、マニュアルのドラフト版からノウハウを学び、活動に活かしている状態。	2024年	<p>ドラフトからの学びはない状態</p> <p>個別研修を通してオトモダチ作戦について理解が深まっていると思われるが、社会的養護下の若者たちとの接し方におけるノウハウの詳細はまだ伝授されていない。</p> <p>実際、ドラフト版として完成したのは2022年8月であるため、活動に生かされるのはこれからである。今後、フレンズからの声も拾いドラフト版に随時追加していく予定。</p>
団体（新しくはこぶねを知ってくれ る人が増えはこぶ ねの協力者が増え る）	協働団体数	協働団体数3年間合 計10件	2024年	<p>協働団体6件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中核地域生活支援センターまるっと（若者支援）</li> <li>・八千代市社会福祉協議会（食品提供）</li> <li>・フードバンクふなばし（食品提供）</li> <li>・東葛地区SSW（若者支援）</li> <li>・指定居宅支援事業所えがお（若者支援）</li> <li>・放課後デイサービスキートス（若者支援）</li> </ul> <p>地域社会には、社会的養護下の若者たちを支えたいというニーズはあるものの、その方法・関わり方が分からないと</p>



				<p>いう意見があり、事業説明を行った。上記団体には本事業体への関心が高く、可能な範囲での協力申し出があり、提供された食品を居場所で利用、若者たちをつなげることもしている。</p>
<p>自団体（はこぶねがオトモダチ作戦を持続的に実施できる体制となる）</p>	<p>自主財源の増加 スタッフの成長度合い</p>	<p>年間600万円の自主財源の確保の見込みが立っている。事業の企画・運営を担えるスタッフが3名以上いる。</p>	<p>2024年</p>	<p>現時点での目標額確保の見込みはないが、賛助会員の募集を始め6名の新規会員が確保された。 現在4人のスタッフが本事業に携わっている。パソコン操作をしたことのない若者が、会計処理ができるまで成長した。また、officeを使用したことのない者がExcelで事務管理表を作成し管理できるようになった。イベントの企画から実施までも担えるように成長している。</p>



② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察
<p>オトモダチ作戦の研修会に参加した人がフレンズとして登録し前向きに活動しているか</p>	<p>集団研修から個別研修へ研修形態の変更はあったものの、結果的にはスタッフとフレンズ一人ひとりの関係性の深まりや、本事業への理解の深まりにつながった。居場所やイベントへの参加も積極的に行われており、登録したフレンズは前</p>	<p>&lt;調査結果&gt; 初回面談を30名に実施したところ15名がフレンズとして登録した。 15名のフレンズに対しては、登録後も個別面談として研修を重ねた。 研修を通してフレンズからヒアリングを実施、以下の</p>

	<p>向きに活動していると評価した。</p>	<p>意見が聞かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達や大人が大勢いる中では、聞きたいことや知りたいことがあってもなかなか言い出せなかったが、個別面談を通してスタッフにいろいろ聞くことが出来、スタッフとの距離が縮まった</li> <li>・施設退所後に入所した自立援助ホームで食事が出ないという相談を受け、一緒に対策を考えた。</li> <li>・施設入所中ではあるが不登校のため退所を迫られている者から今後の相談を受け、傾聴した。</li> <li>・自立援助ホームから独立したいが方法が分からないという相談を受け、一緒に方法を考えた。</li> </ul> <p>個別面談回数は1回の者から20回の者まで幅広い。ほぼ毎週居場所に足を運んでいるフレンズもいる。一方で以前からスタッフと知り合いで居場所に足を運ぶ回数は少ないがスタッフと仲の良いフレンズもいる。</p> <p>上記のような相談を受けたフレンズは、面談回数が多いというよりも、スタッフとより仲の良いフレンズであった。</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>調査から、面談した5割の人がフレンズとして登録しフレンズからオトモダチへの変化しつつあるフレンズもいることが明らかになり、前向きに活動していると言える。</p> <p>ここでもう一つ明らかになったことは、フレンズから</p>
--	------------------------	---

		<p>オトモダチに変わりつつあるフレンズは、スタッフと仲の良いフレンズであり、面談回数が必ずしも多い者ではなかった。</p> <p>現在本事業に参加している若者たちは、概ね以前からスタッフとつながっている者であり、スタッフとの信頼関係が構築されている。若者たちが心を開くには時間がかかるため、本事業で出会ったフレンズとも関係性を構築するには時間を要する。しかし、スタッフと仲の良いフレンズには、比較的早く距離を縮めていることが明らかになった。若者たちが信頼しているスタッフと関係性が出来ているフレンズには安心して心を開いていく傾向にあることが明らかになり、いかにスタッフとフレンズの距離を縮めるかが、若者たちの信頼を得ていくポイントとなることが、スタッフ間で共有された。若者たちから信頼され、オトモダチとしての自覚を得ることで、またさらに前向きな活動へとつながっていく。</p>
--	--	---



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しい</p> <p>と自己評価する</p>	<p>上記に記載した現状報告より、財政面以外については、すでに目標値を達成していることから、事業終了時にはおおむね短期アウトカム目標値は達成できるとスタッフ間で合意した。</p> <p>ただし、事業の進捗状況を図るための指標設定に不具合が生じているため、事業を正確に図る指標に変更する予定。</p>

## B) 事業の改善状況の評価

### ① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の適切性	活動は計画通りに実施されているか	<p>&lt;インケア&gt; 進んでいない。 しかし、受け入れ可能施設にはコロナが落ち着くことで訪問開始できる状況。</p> <p>&lt;アウトケア&gt; 進んでいる。</p> <p>&lt;フレンズ&gt; 進んでいる。 今後は、フレンズからオトモダチへとグレードアップするためにドラフト版を活用していく。</p> <p>&lt;組織基盤&gt; 人材育成は進んでいるが、経済基盤は進んでいない。</p> <p>調査の結果から、社会的養護下にある若者</p>	<p>&lt;調査結果&gt; 関係者4名（スタッフ：代表、監事、理事2名）にインタビュー実施。</p> <p>&lt;インケア活動に関する調査&gt; 児童養護施設でのインケア活動は、コロナ感染リスクや施設側の受け入れ体制の問題により一度も実施できていないことから、事業計画通りに実施されているとは言えない。 施設での説明会については、一回のみ実施され、訪問日程も決まっていたが千葉県内感染者増加のため延期となった。 施設側の受け入れ体制の問題については、それぞれの施設長の意向によるが、外部アフターケア事業所の関わりを不要とする見解や、実績のない団体、県から委託を受けていないような民間の団体に、国から預かっている子ども達を簡単に委ねられないという難しさがあると有識者からの意見もあった。</p> <p>&lt;アウトケア活動に関する調査&gt; 施設入所児童や退所児童の居場所利用、イベント参加は令和4年8月末現在のべ136人。こちらは計画通りである。 要因としては、これまでの活動でつながっている施設入所児童がインフルエンサーの役割を担い、新しい児童に声をかけるなど、退所後も繋がり続けている児童が口コミで誘い合って参加している。</p> <p>&lt;フレンズ研修に関する調査&gt; これまでに40件の問い合わせがあり、そのうち30名と面談し、15</p>

	<p>達との繋がり、本活動を通して保たれており、事業は計画通りに実施されていると評価した。</p> <p>しかし、本事業の要であるインケア活動は進んでいない状況ではあることから、本活動の進捗や若者の変化を図るには、現在設定されている指標では現状を正確に評価できないということが明らかになったため、本事業の進捗や若者の変化を正確に図れる指標に今後変更する。</p>	<p>名がフレンズとして登録した。コロナ感染防止対策の側面、及びフレンズの意見として集団ではなく個人的にスタッフと話がしたいという要望を取り入れ、研修形態を集団から個別に変更した。</p> <p>&lt;組織基盤強化に関する調査&gt;</p> <p>スタッフ3名（監事、理事2名）の自己評価調査からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコン操作経験がなかった者が会計を担えるようになった。</li> <li>・エクセルを駆使し事業管理を実施するようになった。</li> <li>・若者との関係性を構築しフレンズのモデルとなり得る状態にまで至っている。</li> </ul> <p>等の評価が出され、代表も一人一人のスキルが向上していることに同意した。</p> <p>財政基盤については、本事業の現状維持には年間550万円が必要であるという試算となった。これを確保するために、賛助会員募集に向けての必要書類が作成され、8月末時点で6名の会員が入会した。</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>調査の結果、児童養護施設内でのインケア活動は実施できないものの、施設入所者が居場所に来ることで交流は頻繁に行われ繋がりが保たれている。また、フレンズには集団研修ではなく個別研修が頻繁に実施され、登録者も増加した。以上のように、児童との繋がりが維持され、フレンズも増えオトモダチ作戦は計画通り実施されているものの、現在の指標設定では本事業が計画通りに実施されていないと判断される状況であるという意見が関係者から出された。このことから、実情を正確に図ることが出来ない指標となっていることが明らかになった。</p>
--	---	--

<p>実施をとおした活動の改善</p>	<p>事業を通して新たなアイデアが生まれたか</p>	<p>新たなアイデアが生まれ、事業関係者で共有されている</p> <p>児童養護施設入所児童だけでなく、退所した若者たちもまたアウトプットの対象であるということが今回の評価においてしっかり合意されたため、事業計画書におけるアウトプットの表記変更が必要である</p>	<p>&lt;調査結果&gt;</p> <p>第三者ヒアリングを想定していたが、第三者の諸事情により関係者インタビューとなった。</p> <p>① 地域交流の重要性</p> <p>フレンズの一人である主任児童委員より、「地域で活動するのであれば地域に知ってもらうため居場所を開放するのはどうか」という意見があり、2022年4月より試験的に月一回の地域開放を実施した。この地域開放を通して地域住民との接点生まれ食材提供や賛助会員へとつながった。このことから地域交流の重要性を確認した。</p> <p>② 事業対象を児童養護施設に限定しない</p> <p>居場所を利用しスタッフに相談するのは児童養護施設入所中の児童ではなく18未満の中途退所した児童の方がより多い。施設を出て初めて問題意識が芽生える児童が多いのではないかとというスタッフからの意見があった。</p> <p>③ フレンズ研修の個別化</p> <p>子ども達や大人が大勢いる中では、聞きたいことや知りたいことがあってもスタッフに聞くことができないという意見がフレンズから聞かれた。</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>調査の結果、月一回の地域開放を継続し、地域交流を積極的に実施していくこと、フレンズ研修を個別で実施すること、及び、児童養護施設を退所した後、自立援助ホーム、グループホームへ入所した若者達もオトモダチ作戦の対象であることをスタッフ間で再確認した。</p>
---------------------	----------------------------	--	--

<p>知見の共有</p>	<p>アウトプット発生に影響を与えた阻害・貢献要因は何か</p>	<p>阻害要因・貢献要因は明確になっている。</p> <p>コロナリスクを踏まえつつ、施設側の受け入れを進めるためには、信頼関係が必須であることが明らかになった。</p> <p>これからの活動では事業関係者のつながりを大事にし、関係機関との連携を図る中で施設側の信頼を獲得していく必要がある。</p>	<p>&lt;調査結果&gt;</p> <p>事業進捗状況としては、施設でのインケア活動や施設職員への説明会開催以外は事業計画通りであることをスタッフ間で合意した。とりわけ、施設入所児童の居場所利用が活発に行われ、フレンズとの交流、オトモダチとの繋がりがみられている。</p> <p>これらの活動に影響を与えた阻害・貢献要因について以下インタビューから明らかになった。</p> <p>&lt;有識者インタビューから&gt;</p> <p>有識者インタビューからは、新型コロナウイルスによるクラスター発生の懸念、施設長個人の判断が受け入れに大きく関わっていること、外部のボランティアに消極的な施設長がいること、などがインケア活動の阻害要因となっていることが語られた。施設側としては、実績のない団体に国から預かっている児童を委ねることの難しさがあるのではないかと語られた。施設にこだわらず里親やファミリーホームの児童にも対象を広げることの提案もなされた。</p> <p>貢献要因としては、行きたい時に行ける「居場所」を作っておくことは子ども達にとって助かるという意見があった。また、インケア活動という遊びを通して覚えてもらうことが良い方法であること、児童が「困る」まえから繋がっておくためにも本事業が良い活動であることが語られた。</p> <p>&lt;スタッフの気付きから&gt;</p> <p>コロナ感染リスクはアウトプットに影響を与えた一番の阻害要因といえるが、施設側の受け入れ体制も同様に大きな阻害要因であるといえる。有識者インタビューを受けて、スタッフ間では「安心して児童を預けてもらうための信頼関係の構築」について、その重要性</p>
--------------	----------------------------------	--	---



			<p>と施設長の責任の重みに気付かされた。施設側への丁寧な説明と実績をどれだけ提示できるかがカギではないかとスタッフ間で意見が一致した。</p> <p>アウトプットの貢献要因としては、インフルエンサーの存在である。長年の活動で得た「つながり」である。それは有識者、当団体スタッフの意見からも明らかになった。とりわけ、新しい児童の参加には、インフルエンサーの存在が影響している。当団体のこれまでの活動で関係性が築かれている児童がインフルエンサーになって、新しい児童に口コミで本活動を広げていることが明らかになった。</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>上記調査の結果、施設でのインケア活動は施設長の判断に委ねられることから、地道に丁寧に説明していくことと並行して、里親やファミリーホーム、自立援助ホームやグループホーム入所中の児童や若者にも対象を広げていくことの必要性があるとスタッフ間で合意された。</p> <p>また、今後インケア活動にあたって、施設の中のインフルエンサーに出会えることが活動をより進めていく上で重要になってくることがスタッフ間で共有された。</p>
組織基盤強化・ 環境整備	人材は育っているか	一人ひとりが積極的に事業に参画し、自身も誰かのオトモダチになるというのが想定される人物像であ	<p>スタッフヒアリングで調査実施。</p> <p>&lt;会計について&gt;</p> <p>パソコン操作未経験⇒本事業の会計処理を単独でできる</p> <p>&lt;運営能力について&gt;</p> <p>Office 未経験⇒エクセルで出納帳作成や利用者一覧表、諸管理書類</p>

		<p>るが、順調に育っていると評価する。</p> <p>今後、社会資源への知見を広げるために、代表との関係機関への同行や研修への参加で経験を重ねていく必要がある。</p>	<p>作成ができる</p> <p>社会福祉事業未経験→社会的養護への深い考察、若者達との信頼関係の構築、本事業の中核を担うことができる</p> <p>&lt;企画会議について&gt;</p> <p>月一回実施されるスタッフ会議にて積極的に意見を出し、イベント企画を担うようになった</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>社会福祉事業に関わったことのないスタッフ、社会経験もない、事務所処理能力もないスタッフで始めたが、現在は各自モチベーションも高く、積極的に意見を発信し、企画、運営に携わることで、組織を支えている。</p>
<p>組織基盤強化・ 環境整備</p>	<p>組織運営のための財源確保の見込みはあるか</p>	<p>賛助会員を 1800 名以上確保するため、企業助成申請や広報活動を実施するための人員が必要であるが、現在スタッフは4名のみであることから財源確保の見込みは低いと評価した。</p> <p>しかし、今後も地域交流やフレンズを通じた広報により会員を増やしていく。</p>	<p>&lt;調査結果&gt;</p> <p>賛助会員数 10 名目標に対して、8 月末時点で 6 名。</p> <p>本活動を維持するためには年間約 550 万円の財源確保が必須である。それを賛助会費だけで換算すると 1834 名の会員が必要となる。従って、企業助成金申請や広報活動、支援者確保のための営業が必要である。それらを実施するためには、人員が必要であることが明らかになった。</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <p>8 月末時点での賛助会員は 6 名であるが、賛助会員向けの会員申込セットが出来上がったのは 7 月であることから、地域交流や広報活動に力を入れていくことをスタッフ間で合意した。</p>

## ② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

＜オトモダチ作戦に参加した社会的養護下の若者一人ひとりがオトモダチを獲得し、そのオトモダチに自分のことを話せるようになる＞

児童養護施設でのインケア活動は実施できない状態ではあるが、入所児童が居場所を継続的に利用することでフレンズと関係性が構築され、自身のことを話せるようになっていく。居場所につながった要因としては、コロナ禍以前の施設での活動からすでに当団体とつながっている児童がいること、その児童がインフルエンサーとなり新たな児童を取り込んだことが挙げられる。居場所づくりでこだわった点として、「くつろげる空間づくり」「食べたいものを食べられる場所」であることも、児童が定着する大きな要因である。

＜オトモダチ作戦の研修会に参加した人がフレンズとして登録し、前向きに活動している＞

地域新聞（東葉版 61,065 部 2021 年 12 月 24 日発行）に本事業に関する記事が掲載されたことで、関心が寄せられ、問い合わせが増加した。

スタッフが、問い合わせのあったフレンズ候補 1 人ひとりと丁寧に面談し、合う回数を重ねることで相互理解が深まった。スタッフと親しくなったフレンズは子ども達も安心して話すことが出来ることから、スタッフとフレンズの関係性は重要である。集団研修から個別研修に研修形態を変更することでフレンズ定着、及び前向きな活動につながった。

＜新しくはこぶねを知ってくれる人が増えはこぶねの協力者が増える＞

月一回居場所を地域に開放することで地域交流を図った。これにより協力団体、個人の支援者が増加し賛助会員増加にも貢献した。

＜はこぶねがオトモダチ作戦を持続的に実施できる体制となる＞

経済基盤については、賛助会員募集用チラシを作成しスタッフ知人から募集開始。会員数は増加し始めた。

人員基盤については、2 名の当事者がスタッフとして参加しており、当事者の視点で若者たちと接することが出来、当事者の気持ちを代弁しフレンズに伝えることで若者理解への助けになっている。

## ③ 事前評価時には想定していなかった成果

本事業実施にあたり、会計処理やパソコン操作に対するスタッフのスキルが不足していることがわかったため、会計業務・PCスキルの向上に向けてスタッフが学習した。この学習により、会計処理能力が向上し、ミスが減少することで訂正回数が 1 回程度まで減少した。

また、SNS の活用方法を研究しインスタグラムやホームページの更新回数が増加した。結果、当初の想定を超えるインスタグラムフォロワー数増加につながった。



④ 事業計画の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている



事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
<p>残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために</p> <ul style="list-style-type: none"><li><input type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる</li><li><input type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある</li><li><input checked="" type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っている</li></ul> <p>と自己評価する</p>	<p>事業実施状況については、おおむね計画通りに進んでいるものの、施設へのインケア活動が行いにくい状況に伴い、当初の指標設定がアウトカムの進捗状況を正確に図る設定となっていないことが明らかになった。従って、事業計画における指標の見直しを実施する。</p>

⑤ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

まずは、受入れが確定していながらコロナ感染者増加のため訪問保留になっている児童養護施設でのインケア活動を実施し定期訪問につなげる。同時進行で、事業関係者に協力を依頼し、インケア活動受け入れ施設を探す。  
経済基盤確立のため、賛助会員の募集やファンドレイジングへの取り組みを実施する。

#### 添付資料

活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚程度）

- ・居場所の様子
- ・イベントの様子
- ・フレンズ研修の様子